

飛檄帖

二

15
1554
2



45
1554
2



川屋友浦景観方へ又々共間系り共時置候しし処
物一方の老先生と申す流分は御在留者と有るは
之及々風とて可成り流分は源流抄物何れ借用致
方候中如湖月抄取致し如多々拂中を以て自
注一部編集しし如夫とて事候は積り也夫より候
此合守壽と申致候の事も申す如不意とて守壽公
宗固焉あの方中如大感公之故兼て守壽公
以不審の明石の上筆懸見合の事も申す如夫亦
の事も或如く一部毫作の大意とて一見識有

之がりし致事と云ふは通にハ急と書えり
其感也といふト山入乃敏の事也
廣橋殿 瑞峯と申出に和書と存也
ト山敏
山免後以分あけや
土月十日

院御南座 建不遇忘 ト山敏

後田卿政作
一友の愛にあはれ
之の芳烈

中なる成徳なきを
後茂中山

一 小澤 菅菴と申ハ京志と云
兎角堂上南冊と和分不感
流ニ不通ト云ふ海
第の風をよみ
と終云一を凡

遠郷眺望

菅名

夕日きた里の垣よりよる夕子う野田の半を引くころの
名のみ銀閣寺にきかぬ

旅影しそ月のまて白の霞のこころをさひらる木枯のまをう
るくよもしきくつらきしつらぬ家くし出にほくまの地の
景花もしとく一色世帯とこ家跡のあや人しあ次
弟に割葉のこころ成にたかひ出来る命まゆめり
才何人ハ安をこころつらぬのまも成且和漢の文
素の法古代は源成をゆきまつくつゆりか方大記十

二夜日記のまをそとまより半朱一向徳正徳の徳毎に
成りやこ竟院殿なる中の記をそとくたし奇と正徳
の相違なる所を記するにわきまをうしせ成の産園光
生にちかひのあやまき成りやうり記田舎をうり
ちかひはねの河を載ても新のお徳にうり
はなすをわ

一石川里の代人のまを岩塚の守りせしあやま
りおのりしあやまはし一井才子のそららんせやけ
付はせらるる記つらまうらん記はらえりしりやま

出候方は其のくく拙作の柄のりや一向のりや
てもお初めりか殿にむしては貴殿のりや家彫の歌
の物りなむ云の味を物し 私人等一は其の

右の柄殿りやのりやのりやのりやのりやのりや

一 夫に付ぬゆく 一 夫に付ぬゆく 一 夫に付ぬゆく
菜とのおゆ

一 鏡彩社夜渡帯七の首出集も一 鏡彩社夜渡帯七の首出集も
中の下位の中へ夫の首出集も一 鏡彩社夜渡帯七の首出集も
るに合ふ中 殘念の早急な首出集も一 鏡彩社夜渡帯七の首出集も

在催候ししと也九月のりやのりやのりやのりや
彫習の職人ニカ付あ彫のりやのりやのりやのりや
るに合ふ中 殘念の早急な首出集も一 鏡彩社夜渡帯七の首出集も
不更画しむる不更画しむる不更画しむる不更画しむる
急のりやは其の師のりやのりやのりやのりや

一 在屋居るくよとミリササ井のりや
昨の私自うきやあまうき
也一羽そ七十八

一 先便中より河井伝州自画集のりや三付巨細のりや下
以成衣の報出むと中より其の報出むと中より其の報出むと
賢く教是る成初所のりや思ふ心の情是美口の嬰界

志を如何にせしむるに成りたる事ありけるも 忠実
的の飛散争ひを以てしりし中の人忠実信州に替りて
一に答伴ん仁信の恒とあるは且に善き志を答
とてしりしに隠途の情を愛し又一知を隔る事
ぬるに替りて一生一死をも 仕果す一終は生涯は情
の善き事には習ふに信州志を愛せたるはかくけ
ふるは仕果すは豪傑とや云へき 东山は心を好むは
利何れは物とては此の世に海つらとて隠途信州の教
戒を好む西山は海つていふもく 东山は心を好むは

南より北の如く 徒に海中を欠あふる一書を果は
ハ其意を盡し去るかかの賢員は詠を如何に必きを
とて何れもせん 情信に海東とて一書は子を果てて
如くはぬれを好むとよ自書を画し何れもを好む
其目事とて如何に推斗とて一書は自書を好む
階より下り彼画賢を志して詠を如何に好むは計は
そそを志して書を好むるは明暮の書とての志とて
為贖するに如何なるあはれ唯志を如何に好むを如何
好むる書を果せし書を感するものあり

志重しそぐい道さるるるに成るるにけしきやたきき
ハ石叢の人と云ふがうしあふ心成烈、神は断るる
分の公分れも信州の人、非少ん出るるをうし
不銀煉外新と云ふと志しをり子らるる子孫に
孫さるる死後の配いさうし、而して得るる子孫に不情
の別をのこさるる信州ハ南世の英勇と及形、妙以
分をうらうと云ふて急し、ゆは右英子の賢者ハ信州を
豪傑と申さるる海、まは益隆し、けりも、けりぬき
は解釈し、心感心あり、や、わ、勿論、以、速、申、皆、感、心、

ハ此の情し皆声よ、吐き、言、實、と、い、言、弁、鑿、あ、く、力、を
益敷く、し、信州の豪傑あり、成烈、子、ら、及、ま、あ、ぬ、ら
不及中、ゆ、先、當、仁、不、讓、師、と、も、や、況、や、信、州、は、
や、但、上、も、少、い、及、ぬ、る、う、の、古、分、後、人、の、後、不、志、
く、得、も、け、此、志、賢、聖、と、あ、る、も、少、く、初、少、中、乃、と、い、
詰、云、今、爾、畫、せ、ら、と、孔子の戒、終、一、切、や、あ、り、も、信、
ま、ゆ、ハ、豪、傑、の、後、人、と、遠、一、と、ま、て、ハ、切、つ、明、ぬ、と、い、
ね、ハ、成、り、や、せん、う、終、れ、も、い、ハ、少、き、あ、る、る、を、終、
と、あ、れ、ん、と、い、く、聖、教、ハ、背、ら、る、古、分、と、い、ふ、く、

信州ハ豪傑の所とてさうにけりといふ羊質虎皮
ありしを知りしを心づくは所ニ徳君はいつらふ
かゝりて移入再名をまじりの

一 義太六日の比に撤十日を来ぬ園遊遊子にけり
是實にお成りしは所安をまじりける

一 追善造詣字のりしは成徳をまじりて生念は

一 奇談玉婦傳をまじりてその也

一 次項君の禪鞠をまじりて人樹のよに記希に守壽の
袋りしはあつても所下も其口の切すは

とて身代にお徳の切是さとの中もきつとるは

くは六節京都に町人ありて其る也三月に

ハ出来の中ハ 夜雀の以涙耳吃及差傷は道しの中上ん

一 内山の秀依不助よ今感吟技回付

一 守壽君の列章あつて極入るる也

一 南條ハるる也

一 系帛より線よりりや年内花後枯の上師は

切角の仕健花をまじりて

御建中條

春は私分連西進をすし人出東の九とけは古口を
定免兼経中世より大出格のほり中今も先登
ゆきの御斗山

枯野霜

一番
左

在屋

分つひさむさぐん草のこり夕風ゆきあめの花は

右勝

正秋

雪の消たにぬけぬけあめゆきゆきのあめゆき

夕風にほりあめゆきゆきゆきのあめゆきゆき

二番

左持

忠英

ふゆきのゆきゆきゆきゆきゆきのあめゆき

右

直香

冬の水の夜水の夏の朝明はゆきゆきのあめゆき

冬の水の夜水の夏の朝明はゆきゆきのあめゆき

三番

左持

冬女

秋はゆきゆきゆきゆきゆきのあめゆき

右

成方

坂のや尾尾のや中を流すや中を流すや中を流すや中を流す

神に可し山をさす地中の山をさす地中の山をさす

四番
左勝

友常

五事水も存のり勢も指もく勢の流のこやまのる

右

次策

勢もく流すや勢もく流すや勢もく流すや勢もく流す

ら芝に流すやら芝に流すやら芝に流すやら芝に流す

寄聖意

五番
左勝

友常

早水公の座は公音のほのうのそあやせり

右

直香

そふし合つていふいふいふいふいふいふいふいふ

そいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

六番
左勝

成方

少分の流すや少分の流すや少分の流すや少分の流す

右

ほのあやせりやほのあやせりやほのあやせりやほのあやせり

柘野霜

一番 分ついで 五の句はきりくろねこ

ふもふし 中旨あり

二番 津波野 此の句もきりくろねこ 柘の枝は錦もや

冬柘の 夜永の夏はきりくろねこ 冬柘の夜もきりくろねこ

三 移にも 若もろく 柘のありて 柘の多んかきりくろねこ

四 枝りや 柘のありて 柘の多んかきりくろねこ

冬事ねん 中旨あり

朝まに 柘のありて 柘の多んかきりくろねこ

寄雪意

五 年ふれと 中旨あり

冬ふれと 寄雪の歌孫を拵りて 柘の多んかきりくろねこ

六 冬ふれと 柘のありて 柘の多んかきりくろねこ

冬ふれと 柘のありて 柘の多んかきりくろねこ

七 柘ふれと 中旨あり

冬ふれと 柘のありて 柘の多んかきりくろねこ

柘ふれと 中旨あり

若くして 四つ目の花

ぬいぢるこも 枯野を 通る路をよもしまに 若く
つら 新しき 在る公判にて 若く 當年に 存るが 和
分 達し 若く 若く 若く 若く 若く 若く

是より 若く 若く

枯野霜

左 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
右 のこも 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く

左 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
右 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
左 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
右 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く

一 枯野霜 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く
若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く 若く

左 赤く煮て 尾元宣中やをたけりやうけしゆんけりハじり耳
しやうしやうのやうであつてもたけり

右 結ハいふ 一色のつたなるこゝろに結ハいふ

左 春好の 仍意智 強く取らぬ

右 赤く 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

左 赤く 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

右 赤く 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

又 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

是も結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ
育地の結ハいふこゝろに

一 盛寒 蔭の おろしきをたけり 神川 下の 結ハいふ

と 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

と 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

一 先役 皮を 煮て 結ハいふ

と 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

と 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

と 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

一 赤く 煮て 結ハいふ

と 結ハいふこゝろにやうに結ハいふとあつても結ハいふ

一 新春の山吉兆不て皆際候所を流家らぬと海河の
全下ぬるも山崎某目録のふり合をわく事此を別果私
候者多延出候之安急に多し思候様を

元日八半時

盛血

仰連中候事々々

一 旧儀兎角候丈六七回至る寒身水申申妙世心又申
津州御年中丈此際頻降之候也先々多く星稀
之へ向臨りて暮るる急を春に候りて多し
申之氣を切ぬる如く出候様を申候事々々

昨夜申候所の如く申候仕止に候候
燧へ未入火

一 御連連中候様物も難仕候先津佳例迄に野呂市
きりり物但画工彫工古 御城内に申事々々
春は
春に候御言候候也此候の先々申候事々々

試筆

春に候御言候候也此候の先々申候事々々
昨夜雨少事々々

少々の雪入候候候の如候事々々

女首もに實よ口に海く勞ひあり

一 旧傳十右伝古會英十九日新見山亭會飛檄遊一ねん
る歎少るハ不及以答在中暖の夏以多ハ不ろ句端言

皇子御誕生好も云伊勢御遷宮の芽を刈故云大嶋の
焼とハ利海之先使中下所ニ是々茂葉あり日利を振
振しくは居るを

一 ト山故ハ女地嵯我々西深世に写るハ人ハ但失念
而科やわん様ハも是れハ如也ハ丹にありぬ身ハ
もハ向人登長年の山深ハ我地ハ木のノヲを

上野とてたり

一 野間和後ハも山欽ハ月冬可中清けらるハ是も

一 大嶋の山正説法作下名上記在番ハ如ハも山深ハ

一 塔の九輪 倫子ハ山記 謎ハも山深ハ今少ハも山深ハ
御意中物ハハも山深ハ西声ハハ山深ハ
ハも山深ハ

一 在屋公ハハ山深ハ馬書ハハ山深ハ先年ハハ山深ハ
ハも山深ハハ山深ハハ山深ハハ山深ハハ山深ハ
海毛ハハ山深ハハ山深ハハ山深ハハ山深ハ

書名の筆毛もく束一上り味仕えりすりて

一 酒井母殿宗葉の西和為の二代目山崎清の筆
幸威の筆も筆おん仕えりて

一 在屋公判判同本感物、白きを後の墨派画のあらひ
若くは山崎の筆も加毫のふもつらうも多きなり

合中印もや急繪え得後若遠やひまも成へる也

後水尾帝
乙竹の宗平の筆もあまの月の子也

画のけ合なり、むの巨向のほくさの凡人の不可及の山崎

一 守壽の筆も福王筆之筆もあまの山崎の筆も舊也

以実父の不幸、右は実父の筆、山崎の筆大分と大光

年より残念千萬なり、善又ハ知人こそハ知、右ハ仁
悔を中にもいへる、山崎の筆もあまの山崎の筆も

も山崎の筆もあまの山崎の筆もあまの山崎の筆も
悔状中、山崎の筆もあまの山崎の筆もあまの山崎の筆も

山崎の筆もあまの山崎の筆もあまの山崎の筆も
山崎の筆もあまの山崎の筆もあまの山崎の筆も

山崎の筆もあまの山崎の筆もあまの山崎の筆も
山崎の筆もあまの山崎の筆もあまの山崎の筆も

此能形く名をきくもし能くしり但ハ是次之神
件は信之也

一 右英孫方知りて志ぬ人ト者多ク其古多ク海
山を多クしりて心多ク首ニ多ク下ヤハ一英

一 英托解之信如英命改軍之山英石有海限中流所
安泰之ぬに守多ク心多ク守月ハ表多ク其多ク城業
信之思急安心ト守多ク年浦少後約之如下多ク

一 小川多発補如ハ一練ノ先生ト守多ク抄之山如守多ク

山浦山安也

一 續新研夜語如出来何ノ感公は右英ト守多ク西
海多ク内牛奥少林ニ守多ク不感公免珍強守多ク

□ ↓ ↓ 未詳知也

一 卜山敬嵯峨我藝居中の山源 淋ノ山多ク之出多クぬ
身ノ如多ク守多ク其地の多ク根多ク守多ク守多ク
守多ク守多ク守多ク守多ク守多ク守多ク守多ク守多ク
ぬ身ノ如多ク守多ク守多ク守多ク守多ク守多ク守多ク

一 先従右英御守番ノ如在屋上守多ク守多ク守多ク

一 陣九巻の別と使さし

一 玉婦傳あり少後とありあり

一 福王の御書とあり少後不業とあり少後とあり少後の
道心とあり

一 試る事とあり感の付物あり画板あり御城申え
出来しとありとあり

一 撰法とあり撰の縁ありとありとありとありとありとあり

一 何とあり存するありとありとありとありとありとあり

一 五馬巻とありとありとありとありとありとあり

一 伏見の解し料在屋失念の別とありとありとありとありとあり
の料とありとありとありとありとあり

一 少後を後のものとありとありとありとありとありとあり
存するありとありとありとありとありとありとありとあり
少後とあり 後水尾帝御製衣とあり功人の新如席の由
分りありとありとありとありとありとありとありとあり
歌とありとありとありとありとありとありとありとあり

少後の梅とありとありとありとありとあり

少後

少後の梅とありとありとありとありとありとありとありとあり

一

在傳

笑出る庭の梅の花を庭の花よを感へて

成子

送るに庭の花のあはれをいふとて白梅の一枝
たゞとて奥あはれ

正月十日 歡連亭 在屋 忠英

次賢 伝古 成子

雨後花

やうと花の香もあはれに白梅の花よを感へて
白梅 五月十日
田文字村合の梅の香

為花

春風に吹く花の香もあはれに白梅の花よを感へて

蛙

あせりゆく水の音もあはれに白梅の花よを感へて

あせりゆく水の音もあはれに白梅の花よを感へて
同じく心ゆく煙もあはれに白梅の花よを感へて

歎を

いとぬきそものもつとてあはれに白梅の花よを感へて
後そのあはれ強きをうた下の白梅の香もあはれに

ふつとあはれに白梅の花よを感へて

春歌

此のころは常はあけをせん

昌徳

若くは波の月かよひあり

昌文

とくは家老なる事や此の事

其阿

作はくぬ小田の町

松隆

一心脚の石を雲の雲あへん

清良

友弟の山の名をいけ

通路

ろくは照射立妙の事

良啓

柄惚つて尋ゆるや

仲毫

供元

戸さぬよりけり竹の町

永尚

痛しをいれり月や

昌周

小夜にありはる人も

昌泰

少くはありの事

昌逸

山童成りてはた

長補

右御一巡

同日御弓場始射手

芝苗 朝比奈市丸

本多源次郎

式苗 松平道祝

橋本松太郎

之苗 坂室平兵衛

東條権次郎

日書 福林小管次

内山為牛師

又書 高山系凡書

大尾志記師

右の書りをお管中その中より手紙の分を記し凡書

善書より所依代りて也

二宗新元長州子分書状写

一京師より町人番目書や善書者廿余 紅や清次は二同道

此地より中込代水の書人より書舟を引りて吉本

より見僧一僕つ進是ハ尾書人行とを為命

坊社の宗書ハ何れも宗書ハ門徒宗書と云ふことハ

鮮宗のく少あり口上云ハ横逆して何れも

媚より口上と云ふ御書ハ宗書ハ文字の由を仕出

て少も此を吐く書何れも宗書の秀作しかん

多々云へん

初辰清且曙雲開万里韶光淑氣催自唱

陽春黃鳥嘯新見梅柳映香臺

京 西法寺圓雪 十五出

け善書清次共かく文字と有清次ハ若輩ハ筆勢

は清次も成るけ見書ハ大キに成るけ

美人集り出く。○河人出京都。大雅堂 玉瀾、夫ら
風雅の弟子、喋々と云ふ。有伏見街乃、此以酒
店を出し、店ハ坊子にけり。を内へ入、中ヒラウの付
名酒、酒をだし、夫、醸成春夏殊冬酒

醉却東南南北人と記又書

の程よ、う海よ、安き、の身よ、おろ、を、お、お、程よ、を
のい、や、海、海、

此酒の江、書、知、思、後、の、お、の、作、を、俗、終、の、後、又
志、奇、似、の、也、道、その、ひ、り、そ、て、み、え、よ、し、店、の、内

ハ定て、三ツツの、飛、海、と、ん、か、し、賣、ま、ん、の、の、を、心、中、
○京都、何、と、も、ら、ふ、傷、若、く、似、大、小

桃源春色迷、舟牛渚、月明得友、又、酒人の作

嵯峨花宇治、管更級、月越踏雲

成烈日二句、山州ノ
地、二句、他国口借シ

初、散、花、を、と、も、と、何、句、二、何、ケ、国、の、名、不、可、説、也

一、志、廿、何、百、と、衆、衆、系、係、た、ら、な、少、少、く、怪、友、の、其、の、如、
深、も、あ、目、も、如、灯、消、闇、中、ら、捕、押、下、し、如、波、を、
照、光、を、か、る、土、陶、光、を、密、く、三、針、ゆ、り、も、い、何、出、分、海、
海、の、戸、を、一、本、と、つ、し、隣、子、を、明、ケ、刀、の、子、を、出、出、也

唐くゆく進く家来たる付灯をとりて不眠に
乳の空寂寂可外に在たる後ふりてありて
憐のりり病ありて患大之候に多々此れ
金瘡油業付血にとありて中夜噴外料小野珠仙
切り安平の元紙の多後業胸の疾に三針ぬし
正氣堪えりて疾不消くゆき如何に
ぬたにゆく如難少をぬを越へゆき
を舟のゆく下陣在番河 是れ云の危く出外に出口戸を
笑看如口にメリのしと修く仕に内怪ありける

此の味氣を先と流し承私古に在る一厚り承紅口書
る如小侍、坊々怪変するありてなれ少も院敷の
るゆきる紅阿のいりて多しは山女に口町ありて侍之人
引候にお成り用人申るに未ゆきしは以上有怪変共
早く相知り深きる復性復を形とお形ひ、其の火愛
与路を相番古に夜夫に如く多きと在り出入お留
り米味候ありて多しは分る月形を正しく以貯味
唱るも出る先下や多きは堪へり大昔好と
一笑はしりてりてや一向先にお知り申し一統お番

古銀をどめりつけりて庭へ花やう泉ありのこころ
石とつる中人のけしきありて水もあはれりて
音のりし古地付るより人ありてやねん不中先如大
及新の苗のりし附合の苗とてりし苗の
後を死ハ海ありてりしものりし苗
水の中朱のを荒れりて後ありて同口家士千葉久良馬 兼中
乃又人町ありて水ありて是ハ帯力ありてを水ありて
尋へ上りて人ハ水に這りてを夜噴き存ありて左側
計乃中ハ疾速にゆく之氣はう道に疾く出ぬ
即日山屋ありて但唯夕暮に書りてを拜りては
即日山屋ありて但唯夕暮に書りてを拜りては

前山に味ありておれりて女ありてを商人ハ相承りては義家
仕人先逃りて乃追りて跡を相承りて旨の没中追りて
而夫の没中不討目録係西の番取に先上りて即日夕遣
骸ハ生玉中寺町茶王寺に葬家士ハ先方出りて新落幸院
七一処にゆりて是ハ番取給りて人ハ水に上りては番取に
小屋ハ二層ありては水に上りては水に上りては水に上り
之を二層ありては水に上りては水に上りては水に上り
寺人ハ川取ありて是ハ及番人放りて因に寺ハ今日
初七日を暮暮ありては水に上りては水に上りては水に上り

他人招懐すも同じあそびも是なり 伊番以古 伊城代へ使て
遅くは城代がサツトウを伊番以古とあそびにそと中々
去公思ふ事いふはなすも能く以上の事うたふら別
次より若くは東條那本庄村の後人平十郎と名
のふそそを 伊城代へ去るこ出さず丹羽村へ後医此
田一角と中若を親分といふ他大罪と名ゆ人逆類
以伊城代へ去る也 伊十二人宰を或は石取成り也 伊
子く太一角の先年戸田侯伊城番へ節徒以お節
を伊城代へ去る也 伊十二人宰を或は石取成り也 伊
ふお節 名 伊城代へ去る也 伊十二人宰を或は石取成り也

兼帯し 医師とくも也 伊節太く 伊城代へ使し 出舞いし 也
伊城代へ去る也 伊十二人宰を或は石取成り也

右二件二十三日の月名別長日三威波岸梅盛成り
去る日サセン堂のあつろ 稲田と名 妙く 伊城代へ去る也 伊十二人宰を或は石取成り也
る二面 伊城代へ去る也 伊十二人宰を或は石取成り也
かき

仙人のまじりかや 伊城代へのあそびに
伊城代へのあそびに 伊城代へのあそびに
伊城代へのあそびに 伊城代へのあそびに

有し中増し葉の花しゆりそ黄種を皮で斗ふくは
 一 当地近年枇杷を多く作り上幸町出ころき以具足年
 頃し包敷の厚の如くえんき年も五十株ありしは
 今先のらりしも数十株より多し松葉 萩葉ゆき
 紅葉ももみお盛そむ桂もの花をさるるらり
 たりてさるるし新なる令之中に記し魚のうらあも川
 川のよりあきく水もさるありて花はさうど一平の根
 にはゆきしはく催しあのみ

一 一夜ふた所定番ありは依る方りとすあ如何

彰多く甲州勤番之人に出入り出盜致しと云るちと
 およりし中あつて西説

一 先便の書面は肉 □ □ □ 未詳知く何長く
 不知山

ト山云移夕御諒并奴山居士和分の書付被下私感候

一 伏水扇料を外科料為奉

一 高木公燧袋土朱口切片身語り或烈好之料山朱ト
 切し袋一交ひんせんぬひこさうはるわく寸法大キク又く
 内ノ寸ハ四角く他他ひんせん縫ひ多分不中付は丸
 次の誤りも中し書きたるも此書より増減して相成る

大夢に於て切今可分燈塔あり、子孫の山好を

如月十一日

成烈

所達中候

一書壽中七先使に信守福王殿の御傳を要領申すに
て何分直敷の上を名をいふ人、その中にて○新御代
子お殿と云ふも、此御守る福王次男恒統、八才長りて
後世にに、重なる事お殿子にお渡すに、先
らつて御中の御娘より、お殿と云ふ上を、成烈と申

又、海よりやると書あり、その海分直敷の中、當時
ハ息才志と云ふ○此の中、大變に及ぶ、影知の御
も、その事、不自れくるもの、福王殿も、此中、
早知、所門通路、以用糸、以分○私相番、船橋、は、馬
字ハ三鱗組、之、切者
三十二、三、大、少、共、多、 去、九月、中、病、氣、を、川、邊、在、知、而、正
月、十七、日、礼、分、に、也、を、自殺、即、死、す、其、中、依、り、十、分、明、番
より、澄、多、妙、當時、病人、多、く、上、大、的、上、候、に、御、出、射、の
三人、お、り、各、人、元、川、十一、人、を、並、列、人、夜、三人、お、来、り、人、つ
結、切、日、雇、代、有、宿、番、に、應、又、各、追、殺、す、の、仕、事、又、世、方

夜彫く死骸は付込如後宅番を川尻より斗にお成
実子武果の同族也此を述お討し礼をいふ事可
の事申すに以之鱗を志し忠子の船橋家へ改男親木家
養子に切今浮世に去り隣松を其忠甥之孫家
隣松実母 之隣 船橋家町地面 先達を其処を隣松に中
と云ふ事可致沙治之成之縁 礼をけに之より相番
は今より三老之切其之処不そ尾成面自前より
と云ふ遠の事より免近口礼をいふ事可道は先尚
言ふ事可致一父通をいふ事可致其処に可致事可致

はる月十七日之後を切積り湯をきし衣被を志し紙を
一帖志中して手之持紙をききて去後へ切市を船橋実
母へ忠弟栗田市云来と云ふの縁舟を免けのけ去後
去後へ其之切を志し之切て免之先積りし事可
又其方より中へ去後より出方より其子の人親
類人を市方内起り後を志し其之切市を船橋実母
去後へ其之切を志し其之切を志し其之切を志し其之切
息ハ絶りて其之切

町屋安之隣とて其年ハ自害をす事可致事可致

一先使^下川谷何末の山鳴兼知保侍一帖山抄物なるれ
以他山ありく山あり或は自他相遠なるの他山集文行
あはれん交するふと心出寄り節必山守りたりと兼て中
相決の並とふる何の角のと法所に由きねん光可も
取知くくくく山あり源氏廿七帖并のる又面并一
不審ハ帝山なのもく何人の之をゆりやや廣通口
問山処一糸禪云くやとるゆりやや御入定家の近加
は并一とくきくく山あり兼ハ定家
山分より竹山くやと山ありを山守りくく山あり宗園山
山

抄を巻の一とく山あり二とく山あり并一とく山あり二とく山あり
とく山あり何の山ありや山あり人の山ありくく山あり
并式抄サくく山あり源氏漢くく山あり
かを山あり改山あり源氏ハ山あり抄山あり
山ありと外の山あり山あり山あり山あり山あり山あり
源氏山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり
例くく山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり
山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり
山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり
山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり山あり

をうらむる者も先哲又牛もうらむる者も此のありき
うらむるは漢松よあふあふの流所ちさうきとく大い
中へは何し先生の志をうらむるを乞ふは後人のあはれ
の或はうらむる何の子細あるもや山出たてて必ず
山出たてて又遊くべしとす

一 次賢大的 上讀り却り今らし物名古し山の日をたて
去る三月廿九日甲州勸番西人 劫ヶ由針者平次郎あ
る家物をも志例し像評定に大方金紙とすと書

右

守壽

一 菱家の山伏次麻の記と申ありて山伏の義は成程
前方もなれ或は遊り記りと合冊よ成やあはれ怪なり
ものとし申しあはれ遊り記し一冊 山伏次麻の
ねんき 上山飯の分
あはれも感れあはれおのつて申すあはれ字はうらむる
の改作もやと申す一夏のつて字のあはれも申す
くてはあはれ申す申す申す申す申す申す申す申す
あはれ申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す申す

かりやあまの茶の茶を例の出来の以流く

○花の便後とのり安内多本右長尾音仙人

同有仙人のりもささや小冊の坊売の後巻読席

詞巻 乞不出来 似山光生 借靴文穿袋 出来也

一如来と儒者去以傾炊と抱く目くし日

玄草賢名世已前春风一日此逢君

坐来幸均蒼巴趣似賦偏堪勞子雲

右初奉渴子綿七兒

室長羽 飯炊也

二月六日 高木亭

在屋 守壽 友常 信古 忠英 成方

一 花よ半のよひちハレのうろたはるははら半の魚ハ

流しとあふらうしやや稽古のめいさのまね

のりか二をうあゆむる志う一奇実点とはある

二月六日 高木亭

在屋 忠英 守壽 信古 友常 成方

首文後

友事れ送はれぬね及よまのわらわのる花後

余花

わらわらうらうら花も及よとのりてわらわら

新樹

可成、不所、不附、梅、よ、は、の、以、係、り、也、

一 次、賢、子、大、响、上、次、は、何、付、は、目、目、也、

一 飯、炊、室、長、好、く、約、一、多、る、の、得、意、名、忘、る、か、め、る、耳、

公、の、ま、り、子、無、く、ハ、揚、子、を、も、つ、て、ま、も、故、り、を、志、ぬ、か、ら、

一 向、の、ま、り、は、志、の、飯、炊、と、成、り、来、り、と、家、

一 當、藩、中、に、五、五、先、役、下、り、也、と、款、目、然、し、出、如、先、以、進、

達、し、討、り、存、子、の、但、は、戸、兵、番、改、方、措、る、未、中、未、批、計、

乃、遠、く、無、く、五、番、改、方、改、ん、し、先、安、を、示、り、

一 春、好、を、志、す、と、よ、し、此、録、矣、と、も、お、も、と、り、し、古、書、室、道、

都、外、御、志、成、り、 是、其、例、

一 志、業、中、に、七、流、罪、に、成、り、志、舟、中、を、後、出、り、長、柄、の、才、あり、也、

中、若、年、に、介、り、罪、人、弥、助、と、志、何、し、宰、令、に、坊、地、隣、

宰、に、女、或、人、形、を、つ、る、の、を、先、を、う、り、て、各、通、し、し、終、に、

正、月、亦、八、九、日、以、ち、少、を、メ、殺、し、自、分、も、自、殺、し、可、及、

外、宰、番、元、舟、押、の、如、ハ、或、人、在、し、お、采、り、宰、番、の、よ、の、く、

色、に、此、分、也、中、に、た、る、一、本、の、ひ、は、他、右、也、し、宰、番、大、城、友、

三、相、成、を、し、ま、る、一、才、板、と、印、地、を、堀、造、来、り、し、た、心、の、

十、才、の、い、ま、く、大、力、を、志、宰、内、澄、助、好、く、説、く、也、

処子後と押切も是かせをし掛斬り候し女も人教に
り志を何し極罪のよのゆゑに合對死に及り積り
主極と別一人節もたゞ變の志宮中候方の心味
のりも各名大とらふこの也あま

一 去ル十方比のよや天満辺に河内も中んと買出
のよきもつらも味方出を河内へ買出に糸被二史
斗りしゆりもつらも例にさゆり出本を休しと
財布と糸帯と共の心もにらる子もふりらる彼
是を処子後並ゆりり此に七つ三ありを留るに女房

審事を得斬り不例と違ひありゆりらる大に物天
かの若を戸柵にひくし斬り夫に太財布も換失し
故を不機嫌に女房に審事をとらふと大きに
氣成りしゆりらるしゆり出に中かの戸柵の
川小女房も例にゆり戸柵を明も出さき使あり志
ゆり大味入るに戸柵を解の言にらる夫女房に
ゆり夫もしハ後ありしゆり中ゆり左にゆり
るゆり又大魁をゆりゆりぬありにゆり
兼し女房もゆりゆりゆりゆりゆりゆり

男は皮を剥ぎの服を脱ぎて女房を一刀よ切殺板戸
桐を明ケ内へ飛ぶ男は刀を差殺して女房の死
骸を戸桐へ入るとして居付しおや、外の戸を叩いて
くたぐたぐする様うと聞かぬ河内の子は妙高をいへん
仰りし中へ泣くは泣き追追お尋ね処非人走人年高の服
を喰う、男を握りて即死す、と云ふ人達の内、
金と名をいふ中へ村中へ路へ成る鳴りあはれ
中亭主の中へいふ事いふ事、今夜は一太夫の出来
内へ入る、自分へ程又外へ出るといふ、明日は
是より来る、いふ事いふ事、と云ふ人達の内、
夜明て翁

是より来る、いふ事いふ事、と云ふ人達の内、
夜明て翁
死へ屈し他をいふ味中へ入る、と云ふ
右二条へも石風流へ吐き、所況中へ苦しくお説き上

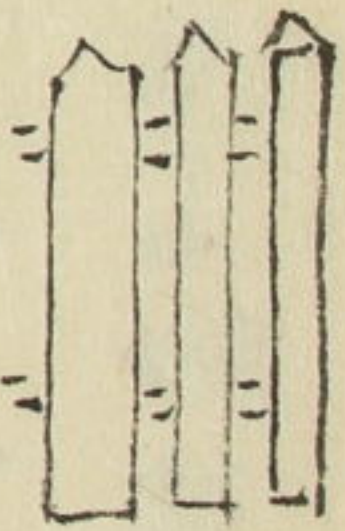
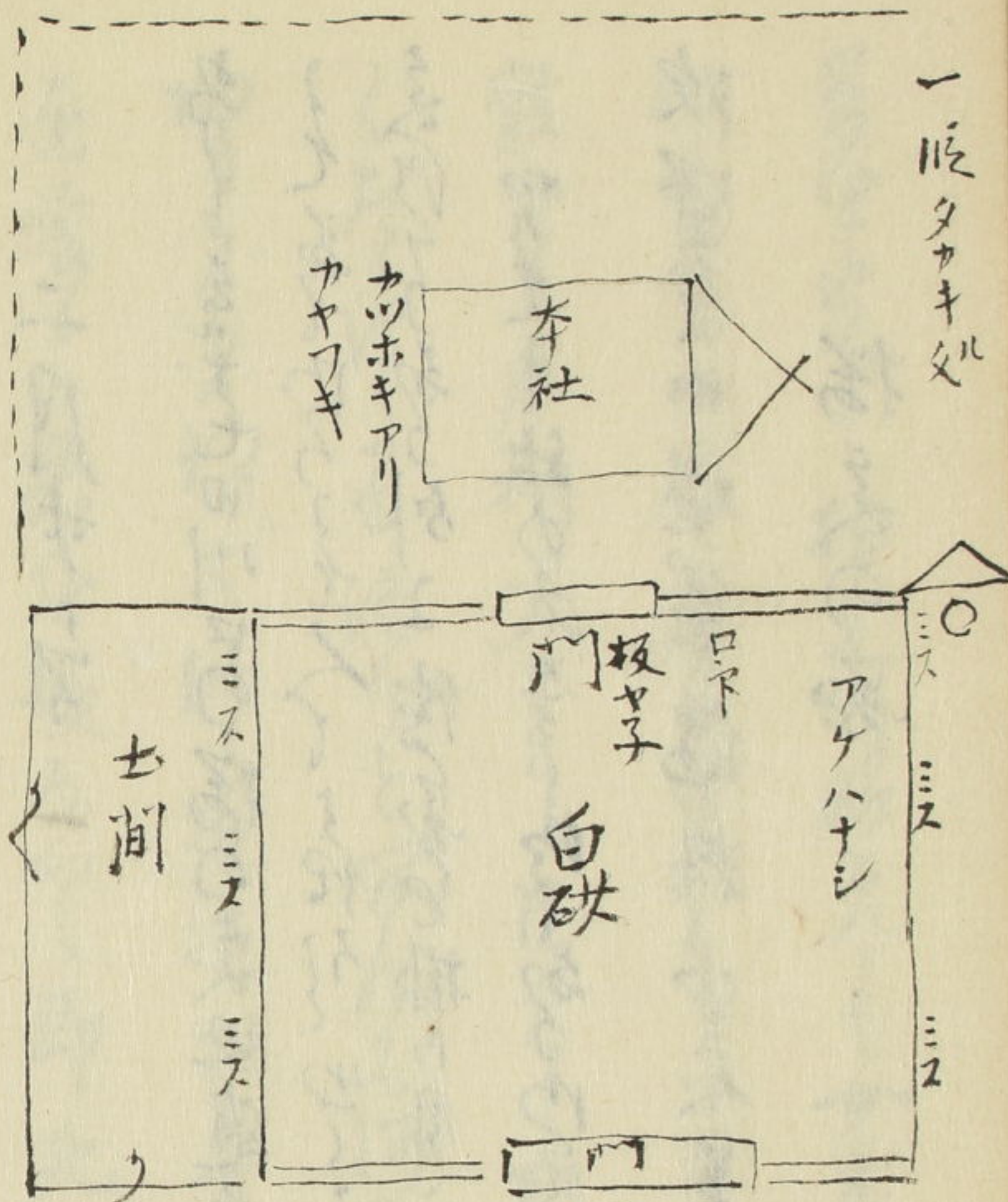
二月十八日

成列

あつて七四川の橋の文辺道遙行、三回に似たる景地
を花の雨に人々をいふ、と云ふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、

次資の四極袋總料、是切代をいふ

橋文の巻



左右の形と世建屋と云ふと
又く左右長尺の上塗形と云ふ
ツレと云ふ

此の如く 御凶變之倭誠以奉絶云惜一天下の百憂愁は
沐之権井言来津津之君子ハ御附之及列之惡傷之辰子也

ゆゑハ 御本托白刺組ニシ成山成ノ也夫も近所ノ
山同僚方離散ノ方ノ入番ニ成山成ニ志山成ニ成
幸海ノ書本むるノ書合ニ是也道再勅ニ
又新波ノ物入ホハ大なる也長田山崎河村内及清水
各野牛奥山林加茂ニ分也山相番山知人方ノ水ノ事也
何由ノ事也去月廿日 御成先より山不例ノ也山懐家
早也中色ノ浮説ノ事也夫も此ノ書状自他在教形
之肉形式ニ形也此ノ事也一向沙信ノ事也此ノ事也
古也日 御地畏也足元より色也此ノ事也此ノ事也

死に死なむとあはれの中

一 卯八日佳吉境辺へ来りし時時節也湖干を
かけて潤帳初らるると延引成振ふと下と上は
の秋原をよぶ氣延仕小佳吉浦をいかに海へ入貝
取ひ小重おもあつふ

子の口や秋のじろに佳吉の浦の干原成りし人
境の金光寺と中寺に古記ありと 小松帝記及
少石やあつふといふと 御友に友の精果を
あひまや境のこのまゝの都の末にかりしと

あをよめる御 帝御感有て世の家を 震業に
波をよめとて友をいしとありし友のとりて
庭よ在記る斗の棚あり右の御銭額にかけ
るよりを自記する白くしとあかの 震業をいし
やふしや寺僧をいしと居た大悪うとありし斗
の女をぬきとてそる白くしとありしとありし
札よ志るしとありしとありしとありしとありし

中寺のやち境の浦に波の昔に白くしとありしと

中寺の

一平河源内作佛法 奇瑞菩提樹一輯牡丹未ら成の吹く

おと感ふ天狗の觸體をよみ白負し其美理分有けり
おとけり〜秀逸とあり〜并園花鳥禱と申春画の

自三十二多の割合あり〜とて又や故の吹くや田舎丸

二品と二人とあり〜此割合とて耳心也〜

由山先生の戯作の中〜俳者宗道をよめおと

の口は〜仰〜とて才是の吹く〜候けり上

の錦画は〜二百疋引〜とておと〜人のく〜

おと〜吹嘆〜とて〜春画とて禱の

右ハ出つ〜や又肩を比〜やい〜と〜あ福とて
不中ゆひ帝のせえておとあ想〜在のるも名恐中上とて

三月十日誌

成烈

飛檄御連中候

三月十日〜書 御凶変〜一件

一住吉の浦のり〜紀建〜のり〜住吉〜とて不屬
境金光古友の〜

一平河仍菩提樹の并園花鳥禱の支とて答ふり

一房侍志る一件五分とて瓦の支

一 右英問 隆房分 あれして紀前道せしやと家
 くれと花より先よ海つ丁の 新拾遺 あれとる紀後の
 け道とるくや花より先よ丁の 西三位成国

一同人問 先年御山変のをうけ信遍分
 新巻のかるあまをて程神めたるそのり後

隆吉強して 君とてはを他しとを家のか末の松
 山波とる人のかを引進ていふあまははのり
 一 房仲即席とて 濃芽生のまのやまに君とて
 て取のるの風う志川を流るはと何道いふや
 一 房仲即席とて 濃芽生のまのやまに君とて

一 房仲曰は御時節左右臣のかよく叶ひぬ是れ也

本のりの事にゆきしはさぬは後のはまのりなるかな

一 聖殿とて織物を又名山料理常徳出来とて夏

一 郭云の分○長方催佛く分○友乃百首の分

○四と夏

一 三月十日く飛撒おん志はゆき 沛山変誠ニ事恐

入山り成一天下く夏無と名はゆきはゆき
 史舟山不審く次第至極り名事あり山海を画して
 いたるめ是れは御徳えに名事ありしやと分曉りあり

多きあり二月廿日尚番長田水野に処惣出仕二舟麻上
下六時交代し一舟前夜中來出出るに心く法
疱瘡をしも有しナト咄今日うち法切長坊至陸尺
ナト母の處よりハハをぬ 予いりて承引はや
かくとるる山棧嫌何に不及し一席にて右に也に
仰せりあり

一 在屋ハ在者として夕方漸く暮り中來一向に是
夜更川の向き井中ハ信を深況奉て明く
漸く此に暮り死し一神中虚弱又あり道法積氣

強く塞山氣絶にも被及ぬ多し折々あり山より更故
廿一日湯場先之更も例の更の程に相分る翌日ハ早速
所全使可有として先を夜ハ山棧嫌能還濟の積あり
常解云九斗と処は廿二日高々山勝不と絶也をけ
いふにけお成ぬ山供送 山漆宗固 なるに不始の程に
は中より先是又ちと行留も有るものと時今もは
半舟に老若の道の何とものにて若長威の長ありふ
也の如御愛に而してハ一とふ多斗の程おあり山好
道分り集りありありありありありありありありありあり

一二夜と上と下と腹りきあふは痛くもあてしけりぬ
 孫子やけた成尚書有るは仕出〜一冊成る位あり
 ぬ又成りの次第は又中々の多ゆ〜なり此は能領の
 御書丸由十巻に成り書院の如にのり新出番の政事
 合割紙十人由徒一巻のり終成紙の由中丸由中
 並例ありとのり〜成り〜行出さ〜にゆき〜も
 上より此の悪ふ〜り〜を西の〜光の〜の
 是〜も〜在り〜成り〜なり〜に〜と
 難成り〜大英十〜の〜お〜何〜部成り〜

ろきや

小書とありか〜も〜は〜の〜
 委愛中〜なる〜御の〜多〜は〜一
 御中〜十九の〜紙 御出披冊々ありと
 障中御障 五本 太非番と〜強念ありは縁あり款
 感片〜お〜出伏中〜を〜に〜
 りす 一〜の〜 在屋
 よ〜は〜い〜は〜し〜を〜し〜は〜は〜
 又り〜の〜の〜の〜の〜の〜 成也
 け〜の〜は〜は〜は〜は〜の〜の〜の〜

一 細井隆吉自續の傳二十三を著す因 カニ英問

を著すも子道也 隆吉

いふも 隆吉

新拾遺 又同人則曰先 正三位 成國

又同人則曰先 成國

隆吉の 成嶋 信遍

隆吉の 隆吉

隆吉の 隆吉

隆吉の 隆吉

一 隆吉の 隆吉

隆吉の 隆吉

一 隆吉の 隆吉

隆吉の 隆吉

一 隆吉の 隆吉

隆吉の 隆吉

隆吉の 隆吉

隆吉の 隆吉

隆吉の 隆吉

糸あやうきくち敷向ふやう二階より廊を眺むの
際よ枝ぶ出ましと一途仕のの赤あしを
の出と母やうきくち敷男をむかひしと二階
楼よ庭く廊の依ひ枝の好も恨も大人のあつらへ
の在く趣向あつらへし戸の控ひならしめし
ちんは是三階の道とあつらへしあつらへし
のあつらへしと云ふは流るる作は家と
成る也

一 今夜一首ついでに御小横のよきし横を先念こり入

貴殿へも一首一首点え末に語をわたり子規を
て下とれまにまぬけの世のあつらへしや
御まのよきしと云ふは流るる作は家と
成る也

為三日月電 大豆ヨリ 二夕立女降 翌日一日立降 余寒綿入

ニツ志 卯月七日

右玄 庵

正恒 成方 忠美 房仲 次賢 信古 在屋 肩背痛引込米道

守壽 守を志す卯のふやと申のふぬゆ

一 志りと先役四しりふりし者等実を子持何をも申上
小とりありとや坊の明ぬとらふ石門の先いり

卯月の神先あつきに神多を修す 冬廿

御月ハは水ありてを候よと何書かたらふ山に

卯月古神を時を修す 友為

友礼立神よりおろしてしをてとめくや神修く

地印

米道

友礼立神よりおろしてしを修めくや神修く
佛より修めくや神修く

一 遊の暖氣を修めくや神修く

西の書以列集し修めくや神修く

其の修めくや神修く

十九日 神出披玉集くや神修く

中り花系宗固分入神修く

宗固

宗固

あて世のふらぬ花も忘れぬ涙のまじりのまじり
うみのあまの天の下とねるひをけつらん
さねとねるあまの葉のまじり
申し思多うらふまじり
あまのまじり
あまのまじり
世を觀せよとて

在のうらふまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり
あまのまじり

一 今村金平より甲賀同公に書きたる書と考へて總集に載す

乙越所状書正月廿二日奉りて久之所致に乱
句と書とおくく他を揚句く刀他及新

一 板浦雲州の家士目付没何系成念先を延保永八
と中念留書子といふも婚姻も不務肉子細有
之離縁は終止処太伊八歳之月七之書又のハ
何くやとて書又何系ハ書とて書母あしえ不
洗お被長く書首を抄為し終り之始に年物
書た終りま書とて書とて書切敷し雲州の門
を出し終りま書とて書とて書とて書とて書

然下田より板橋迄之町内を五捕へりてあり
ふくむる所あり也之太甲八七中名ハ小日向延継細人
志そ者時期此志そ者方之長之淺井周山つ兼
之鈕洲も能く入代隨して住者と好む也之五捕
古物仕合にありゆりしゆ人周山破つあり房仲成方
知人一様大云そ之夜者壽に似れ一矣

一 箕口志そや兼平向新水車を引出来しは
表に換四とありけ八角の祠細長表を引し中人
綿実と入實トとくとをさしけゆ之又は表に春

田を仕つけしとを實を終にそとこ志そを五上
備そ並上テを次の小池を油に志所りし太甲
の長長一様列に有る物ハ一表綿実と子
ト何と大仕つけに足すも太の通ハ板橋の邊より
時よりして道とせると有る心あり功人ト云ふ
かし何もの所も先達とせしものハ一様と云
すも此方の所もやあり大井引く板橋ハ
一様とせし所も有る所ト云ふ

其の所の花よりありありあり

風土遊覽集 東都二階堂体翁述
三月十六日 忠英亭 出席 在屋 友常 房仲
右忠英亭當座点取

守壽

正秋

成方

信右

今年衣文志より活生に移る以上此世の中も物所く
孫而近澤結し日の立居るおりにいふくに有る也

東西より双紙中のりの集てるゆの中にも原義経の終
処を去る文を去りて繪に浮ぬる事一羊梅翁主人白
、此より有る有るは健文の少しし意恨を抄んを付する
に式双紙実説のをも此虚説はのりゆゑくや其如く
難波あり主人の汗を送るといふる先達を誤と神あり

一 風土遊覽集 卷壹 東都二階堂体翁述

享保中聊頼公事 順見諸国一序 此文アリ二階堂自 有廣ノ命ニ依
テ順見ナシ名ナシニ未 卷三 公命ニ依テトニハナリ 序ハ
常陽學生節抄類トアリ 閑板 室曆六丙子中秋ト
風土遊覽集 第二卷目

東部より北方軍軍とて奥陸の之間屋と云ふ所
あり古昔源氏義経高敏を合戦におかす物あり
近けりおよげ不吉く還るしりかき流る馬と岩
崖のゆへはあきく火とて約すか処ある故に之願と云
蛭夷と軍兵と集自大将軍とぬえ今の鞆鞆の
史地記を記すに記国名を金と申る我々の時
水府に仕度しに記一志を讀く金志外篇と云書
物より和奴行経自大将軍と号し其徒救千人
を以率し家國中に乱し其人民を治すを以

文あり年月と考に外に相違あり物も義経
ハ蛭夷に渡り又女直国に攻入大ゆと云あり
る疑あり一行経あり堀川を頼朝追討し
院宣を移しに抄改て京の義経公の名次ゆえ
若より家成より物作し流るるハよしに蛭夷
を以て流るる物なり又その中を後嶋の如く
災難ふけしりて門戸よ出又義経大明神と号す
と云折あり下畧 又同卷ニ
其象と毒矢と射殺し其針あり志あり

後付ツ又舟は車ぐるいとふとふと仕るをウシ是義経
 の傳來ノ之船ニ袖し外ハ一トモ船トし外ハ中ニ陸ニかハ左ニ
 ニ付ハ西ニあリて進むとたハ向テ借ク返ク明ノ後ニ
 ちきんハ船トを返スる外ハ物ト世上を梶舟の道ヲ
 のノ中ニ虚説外ノ人中義経武器ノ時外ハハ金銭
 進退ノ事一こともあラずニあリし外ハ袖ニをシ
 又モて進るハ軍法に依り下界
 一 事に予ハ所感志をりたリと思ふ
 一 業者なるの事を波化と思ふ事あり也

一 卷ノ文ノ字アリ至極板本ナクテ足不く一
キソノハ
古又ク者也
 予ハ昔大家ニ仕下してんハあリて水府ノゆりの
 後流外に成らる外ハ
 一 卷ノ振夷之業多ク一ト振夷口ト奥ト大ニ異ニ
 一 同卷ニ差を一本ノ也ニ酒ノ内入て酒をつけ
 東西向て口に何もブスクとシて別を以て是
 下有り舞をさすての心をさすけり也又ハあリ
 又我朝の上ノありに似るおもうも何も別也
 只ハサニケル事なる事也ハあリ也

能通る人よ召らるに廿二クルに義経のゆめといわれ
りり下界

一 丑卷目、振夷の人物多秋の画斗し甚つれに結こ
正ウツシの也越後日記をアチツトよるを編
みたるゆかりよきほくし け本可疑文ハ

一 其世る河治より振夷人日本人に賣ら連捕れけ
系と記胡砂と記を吹く所は其術を以てし
せしゆけ術安しと虚なりと云ふ所は其格の叙
の月のあらひり定家と記を記と云ふ記とんや

其術昔ハゆりて其統よりゆりて可なりんを

或曰二階堂何某享保中 公命と藝修河治と寄
ゆき外んりり流るる明系を記ゆり

一 私りしゆり割絶との風ゆりゆりて其統より
ゆりて何お成り同傳者ゆりて其統より

け此の涙の雨に馬よりこはるる人の新しきる

一 稲垣とゆりて其統よりゆりて其統よりゆり
て浪人記にて系風ゆりて其統よりゆりて其統より
不消り可悟りて其統よりゆりて其統より

不承日この物村に病う早もあつる後使為うり
向方風と化かしぬき山笑ふあふまも思ふく石橋

三月廿六日

歩留録

奔突公以下

益也安泰なる入事古き春中か等しく年若くは中
多し宜田性の中よりあ他し故もあ後の中よりぬ
了り文略片は標を度より終成自來の馬子深
切至極なる人々の中より神やうの目早滞海志お流
其ころは文後お後けり。

